

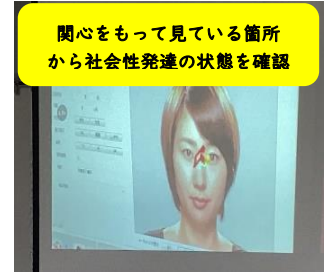


令和7年9月

地域支援センターだより

地域支援センターやわた

第1回「スキルアップ研修会」を実施しました



7/31(木)、大阪大学大学院連合小児発達学研究科・研究科長 片山泰一教授をお迎えして「発達障がいの子どもの理解と支援」をテーマに御講演と、「かお TV」(社会性発達の評価システム)の実演をしていただき、保育園・幼稚園・こども園、小学校、中学校、高等学校、関係機関の方々、約40名の皆様に御参加いただきました。

研修会の冒頭で、片山先生が一枚の写真を提示されて見え方について参加者に問いかけられたところ回答が二極化し、同じ画像を見ているはずなのに受け取り方がまったく異なることに驚きの声が上がりました。この体験を通して「私たちが“当たり前”と思っていることは、自分自身の認識や感覚に基づくものであり、他人が同じように感じているとは限らない」という視点が示されました。そこから、神経発達症(発達障がい)のある人と定型発達の人が見たり感じたりしている世界の違いは、脳の神経回路の違いに起因していること、その違いを客観的に理解し、互いに合意形成を図ることの重要性についてお話が展開されました。

さらに、インクルーシブ教育の推進や合理的配慮の提供にあたっては、アセスメントに基づき、「医学モデル」と「社会モデル」を統合した「包括モデル」による支援の必要性についても具体的にご説明いただきました。

御講演に続いて、子どもの見え方や感じ方を“見える化”し、客観的に理解するために開発された「かお TV」の実演も行っていただき、子どもの社会性の発達を理解する一助となることが実感されました。

御参加いただいた方からの感想(一部抜粋)

- 自分が見ている物が必ずしも正しいとは限らない、違う事は間違いじゃない事もよくわかりました。その子に合ったアセスメントを行う事が、合理的配慮やインクルーシブ教育に繋がることも改めて学びました。保護者対応についても、今後は先ず保護者の思いに耳を傾けていきたいと思います。【幼稚園・保育園・こども園】
- 「当たり前」と思っているのは自分の認識や感覚であり、事実を客観的に捉えなければならないと改めて感じました。一人一人の子どもを、医学モデルだけや社会モデルだけではない「包括モデル」の視点で、アセスメントしていくことが大切だと感じました。また、褒めて育てることで傷つき体験を減らし、成人期の問題を減らすことを知り驚きました。かお TVの実演をとおして、社会性発達を客観的に見るツールとして活用できればと思いました。保護者の方の困り感の傾聴、関係構築を大切にしながら思いをしっかりと傾聴できる教員でありたいと思いました。【小学校】
- 「目で見えているものでさえ人それぞれ違って、正しく認識しているとは限らない」ということを実際に体験し、『違い』を知るには客観的な指標が必要だと改めて理解できました。アセスメントを元に、医学面・社会面の両方を考えた包括的な対応をしていく重要性がわかり、今後の指導に活かしていきたいと思いました。その子に合わない教育は、ACE(逆境的小児期体験)になり得ると教えていただき、自分の基準に合わせようとする指導ではなく、アセスメントをもとに適切な支援をしていくことの大切さを校内に広めていきたいと思いました。【中学校】
- 高校でも特別支援教育はずいぶん浸透してきましたが、進路や受験、集団行動といった活動の中で、なかなか個別最適の学びや環境調整という発想が共有されにくい気がします。正しい知識や科学的知見に基づいた指導支援が組織的に行えたらと強く感じました。【高等学校】
- 一人一人の違いをしっかりと受け止めて関わっていくことについて改めて考えさせられました。自分の考えをアップデートしていけるようにしたいと思います。【関係機関・その他】